

(様式2)		平成26年度 自己評価表		鳥取県立鳥取養護学校
中長期目標 (学校ビジョン)	人とのかかわりを深め、自分らしさを発揮しながら、生きる意欲や自己肯定感を育む学校	今年度の 重点目標	1. 病弱教育、肢体不自由教育の充実 2. 児童生徒、保護者、教職員の連携による創立40周年記念事業の実施 3. 児童生徒及び保護者への支援の充実 ①支援会議、サポート会議等の充実 ②心の相談活動の充実 4. 教職員の対応力の向上 5. 授業などへのICT活用の推進	

		年	度	当	初	評価結果(10)月			
評価項目	評価の具体項目	目標(年度末の目指す姿)		目標達成のための方策		経過・達成状況		評価	改善策
1. 病弱教育、 肢体不自由教育の充実	学校ネットワーク構築事業(病弱)の実施	○パートナーシップ校の教育実践・校内研究の内容が把握され、教職員全体に適宜報告されている。 ○本事業で明らかになった病弱教育の現状や課題について、教職員全体に情報が発信されている。		○パートナーシップ校の実践についてホームページや電子メール等で情報を得る。また、担当者間で教育実践上の課題などについて相談する。 ○年3回(6月・12月・2月)、パートナーシップ校全体で情報交換会を実施(参加)し、本校の情報を発信したり他校の情報を得たりする。 ○パートナーシップ校で開催される研修会等に参加し、そこで検討された内容について教職員全体に報告する。		・第1回は本校で開催し、パートナーシップ校の5校が一堂に集まり、情報発信・情報共有が行われた。 ・会では、学びが多く、実践に役立てられる等の肯定的な評価が多く、構築されつつある。 ・会については、教職員に報告し共有している。		B	・パートナーシップ校の企画の研修会などに参加して、理論や実践に関する情報を得る。 ・今後、テレビ会議等を通して、担当者間で「校内研究のあり方」、「病弱教育に携わる教職員に必要な知識・技能」、「研修会の持ち方」等についての情報交換を行う。
	病弱教育及び肢体不自由教育に係る研究・研修	○本校児童生徒に関する病氣や障がいについての理解を深め、学んだ専門性を生かして、授業実践を行っている。		○教職員全員が各研究グループのテーマにそった研究実践を行い、一人一授業公開(事例実践)により、授業改善に取り組む。 ○教職員全員が課題意識を持ち主体的に研修会や研究会に参加して、他の教職員と討議し合い学び合う。 ○教職員一人一人が自らが研究・研修する内容を明確化し、専門性を高める。		・積極的に「お役立ち勉強会」や各種研修会に参加したり、お便り類を活用したりして研修を深めているが、実践に十分に活かされていない。 ・実態に応じた研究グループに分かれ、テーマに沿って活発な協議がなされ、一人一授業公開をしながら課題意識を持った授業改善を進めつつある。		B	・指導内容表の活用の実際を検討する。 ・研究会等を通して、学んだことや協議したことを共有する ・授業改善が日々の実践でどのように図られたのかをグループ研究会で話し合い、授業評価をもとに検討する機会を設定する。
	単一障がい学級の自立活動の内容及び指導形態の検討	○指導内容表を活用し、児童生徒の実態を的確に把握し、指導ができています。 ○小学部・中学部・高等部・自立活動部で連携を取りながら、自立活動の内容及び指導形態等を見直し、改善することができています。		○小学部・中学部・高等部・自立活動部が連携して、実態把握、自立活動の内容、指導形態等に関する勉強会等を実施する。 ○お役立ち勉強会、自立活動だより等を活用して、実践を共有する。 ○先進校視察を実施する等、自立活動の指導に関する情報や資料を収集し、情報を共有する。		・個別学習とグループ学習を組み合わせで実施している。個別学習では、身体の動きを中心とした学習、グループ学習では、コミュニケーション、人間関係の形成に関する内容の学習を中心に取り組んでいる。 ・小学部・中学部・高等部・自立活動部が連携して、意見・情報交換をして、共通理解を図ろうとしているが、まだ十分とは言えない。		C	・ソーシャルスキルトレーニングの学習を実施し、社会性や心理的安定の学習につなげる。 ・単一障がい学級生徒の自立活動についての考え方、目標等の共通理解する研修や情報交換会、「お役立ち勉強会」等を行う。
2. 児童生徒及び教職員の連携による40周年記念事業の実施	教職員、児童生徒、保護者等の連携による記念式典、記念学習発表会等の実施	○児童生徒や保護者が、学校設置の経緯や歴史等について、知っている。 ○教職員や児童生徒、半数以上の保護者が自分ができる内容の事業に関わり、取り組んだ。		○創立40周年記念誌を発行し、本校の歴史を知る機会とする。 ○記念学習発表会で本校設置の経緯や歴史等について発表する場を設ける。 ○保護者と教職員の会として、記念学習発表会や校内作品展への参加を呼びかける。		・式典では、高等部を中心にオープニングで手話の歌、創立40年間の足跡を発表した。 ・花壇のデザインや草取り・水やりの世話等、教職員と児童生徒が取り組んでいる。 ・創立40周年記念事業をみんなで行う意識が浸透してきた。		B	・学校便り、ホームページ等を通して発信していく。 ・記念学習発表会へ向けて、各学部や保護者の発表する機会を設ける。
	アクティブアクション創造事業の実施	○好きな花を選び、植えたり、水やりをしたりして継続して栽培に携わる。係活動を継続して行い、達成感を味わう。 ○校歌や手話の歌を覚え、自分なりの方法でできる。		○花に興味を持てるよう色とりどりの花を準備して児童が選べるようにする。日々の水やりの大切さを伝えるとともに、花の成長を教師とともに体験する。 ○校歌や手話の歌を今月の歌などで日常的に聞き、発声や身振りで自己表現する力を育てる。		小	・手話の歌を今月の歌に取り入れ、児童に伝えた。歌詞の一部を見ぶり動作で表現したり、音源や曲の抑揚を感じたりして、一人一人が思い思いに表現する姿が見られた。	B	・水やり等の花を育てることを通して、他、クラスや他学部との関わりを広げていく。体験活動を通して、達成感を味わう。
		○学校のあゆみを調べたり、卒業生等に関き取りをしたりすることをとおして、学校で学ぶことの大切さを知る。		○生徒が調べ学習、インタビューなどを通して学校の歴史等を調べたり、工夫してまとめたり、発表したりできるように取り組む。 ○造形、花の栽培、歌に親しむような活動と一緒にすることで40周年のお祝いの気持ちを表現できるようにする。		中	・手話の歌を朝の会や学習時間、休憩時間に教師と一緒に練習し、40周年記念式典では自分なりに表現をした ・学習発表会に向けて、調べ学習や記念作品作りを行っている。		・学習発表会で学習の成果をまとめて発表する。
		○「調べ学習(鳥取養護学校の歴史等)」、「手話の歌(心と心で)」、「傘踊り」、「花の栽培」に生徒一人一人が意欲を持って取り組む。		○「総合的な学習」を中心に調べ学習に取り組む。 ○SHR(朝、帰りを)を中心に「手話の歌」に取り組む。 ○同好会を中心に「傘踊り」に取り組む。 ○作業学習、係活動、児童生徒会活動を中心に「花の栽培・管理」に取り組む。		高	・手話の歌「心と心で」はSHRを中心に継続して取り組み、生徒の意識も向上した。 ・傘踊りは同好会、音楽の授業を主として行い、調べ学習も取り組みつつある。		・継続して「手話の歌」「傘踊り」等に取り組む。
	障がい者芸術文化祭への参加	○中・高学部単一障がい学級および重複障がい学級生活コースのより多くの生徒が大会に向けて、傘踊りや合唱に意欲的に取り組み、大会に参加することができる。		○音楽や同好会の活動中に合唱曲や傘踊りを取り入れ、大会への意識やスキルを高める。職員全体で連携し、生徒たちに大会への参加を促す。		・主として音楽の授業や同好会の中で、充実した傘踊りの練習をし、生徒たちの大会への意欲が高まっている。 ・指導、連絡調整、必要物品購入など大会までに必要な仕事を、職員で分担・連携して進めている。		B	・安全かつ自信を持って発表ができるように、大会当日まで引き続き指導及び準備を充実する。
3. 児童生徒への心の相談活動の充実	関係者会議、支援会議、サポート会議等の適宜開催及び充実	○教職員に各種会議の趣旨が周知され、主体的に活用する姿が見られる。 ○関連する各種会議を有効に開催し、よりよい解決策を導くことができている。		○各種会議のつながりなどについて理解を図る。 ○保護者アンケートをするとともに子どもを語る会等によりニーズを把握する ○事前話し合いによって目的や方向性を確認するとともに、事後のフォローアップ(実施状況の把握、関係機関への連絡等) ○指導効果を上げている事例を適宜紹介する。		・校内支援体制を図式化し示し各会議のつながりを全職員に知らせ共通理解をしたところ、意識が高まってきている。 ・保護者からの希望が増加している。また、必要に応じて各学部からニーズを把握するように努めている。 ・事後のフォローが課題である。		B	・前期分の実践事例の紹介とともに再度支援の流れを確認し、効果的な支援の在り方を啓発する。 ・支援会議後(指導経過をふまえて)の担任及び保護者アンケートを実施する。 ・関係者会議やサポート会議とのつながりをふまえたり利用したりして効果的な支援を考える。
	「子どもを語る会」「心の相談活動」の継続的实施	○課題となる児童生徒について、状況や支援のしかたについて、共通理解が図れている。 ○相談期間中、主として単一障がい学級の生徒が学期に一回は訪れ、気になっていることや悩み等を職員に相談している。		○「子どもを語る会」の記録を集約して、各種会議につながるような道筋を作る ○支援事例の集積を行う目的でiPad活用強化月間を年3回行う。 ○毎月相談週間のちらしをクラス掲示し、期間や担当者などを周知する。 ○年3回生徒に相談希望のアンケートをとり、希望生徒に相談できる場を設定する。		・学部会、子どもを語る会を通して生徒について共通理解をし、誰もが同じように関わることができるように指導・支援の統一化を図っている。 ・より児童生徒の実態に合った相談活動をするためにアンケートを実施して取り組んだところ相談件数が増加し、定着してきている。		B	・子どもを語る会で課題を見つけサポート会議や支援会議へとつないでいく。 ・相談アンケートを実施したり、教室に出かけたりしながら、継続して取り組む。
4. 教職員の対応力の向上	教職員の対応力向上に係る研修等を実施	○教職員が、児童生徒や保護者等に共感的に接することができるとともに、組織の一員として必要な対応力を身につけてきている。 ○担任、学部主事、管理職の連携のもとに、保護者等への説明責任が果たせている。		○校長等による対応力研修を計画的に実施する。 ○保教の役員と連携を密にし、役員会等で要望を精査し適切な対応に努める。 ○担任、学部主事、管理職等が常に情報を共有し、組織的な対応ができるよう連携を強化する。		・対応力研修を2回実施した。おおむね充実した内容であったが、ディスカッションの時間が不足したり評価の返しが不十分だったりした。 ・保護者の意見を取り上げ、保護者と教職員の役員会で話し合ったり、担当者で話し合いの時間を設けたりして対応しているが、解決に時間を要するものもある。		C	・第3回対応力研修会を実施する ・出て来た意見等に合わせた評価をしていく。 ・保護者からの意見や要望に対して速やかに対応し、十分な聞き取りをして、タイムリーな返答をする。
5. 授業等へのICT活用の推進	県立特別支援学校ICTを活用した学びの支援事業の実施	○教職員がICTを活用した学習をする場面が増えている。 ○iPadの活用方法について教職員の理解が進んでいる。		○活用スキルと活用意欲の向上を目的にICT活用研修を年3回程度行う。 ○実践事例の集積を行う目的でiPad活用強化月間を年3回行う。 ○職員間でアプリの情報交換を積極的に行う目的で、アプリをできるだけ多くの職員が導入する。		・6月にiPadの基本操作及びアプリ導入スキルを習得することを目的に活用研修会を開催した。 ・第1回強化月間に職員から22例の実践報告が寄せられ、アプリの効果的な活用場面をまとめて報告集を作成した。		B	・活用研修会の実施や実践報告集等、継続して取り組む。 ・有償アプリを含め、導入を円滑に進めるための研修会を終礼等を活用して行う。
	ICT(タブレット端末等)を活用した教材づくりの普及	○iPadで教材を作る研修会に多くの教職員が参加し、その方法を理解している。 ○iPadを日常的にコミュニケーション支援機器として活用する教職員がいる。		○お役立ち勉強会を活用し教材作りの研修会を年3回程度開催する。 ○終礼などでコミュニケーション支援アプリの紹介を毎月1回程度行う。		・教材作りを目的とした希望者対象の研修会を夏季休業中に部分的に開催したり、終礼を活用してアプリや機器の紹介を進めたりして、情報提供が行われた。 ・アプリの効率的な導入方法についての研修が必要である。		B	・研修での講義がすぐに活用できるので、できるだけ早く教材作りの研修を行う。
	ICT(タブレット端末等)を活用した授業の充実	○全教職員が何らかの学習場面でIpadを活用する計画を立て、実践している。		○各学部ごとに学部会や終礼の時間をとおして、お互いの授業におけるIpad活用を紹介し合う。 ○校長が行う評価育成面談で、教職員の授業におけるIpadの活用計画や実践状況を把握する。		・iPadの活用方法等知識が深まりつつあり、積極的な活用が見られだした。 ・余暇活動の指導としてのアプリの活用は進んできたが、教科学習での活用は個人差がある。 ・一人一人に合わせた調べ学習等での活用は進んできたが、集団で活用するアプリの発掘や開発は不十分である。		C	・各教科領域に合った活用方法を研究し、実践に結び付ける。

A:十分達成(100%) B:おおむね達成(80%) C:変化の兆し(60%) Dまだ不十分(40%) E:目標の変更